

戦後労働者の演劇運動と討論の場

公益財団法人日本近代文学館 長島祐基

1 目的・課題

本報告では敗戦から 1950 年代の労働者の演劇サークルを対象とし、上演作品を巡って労働者の間で交わされた議論の論点とその変化を検討する。戦後サークル運動では広範な討論の場が存在していた（大串 2014）。演劇サークルの場合、運動指導者が提示する演劇の理念とサークルで作られた作品の差異（小川 2009）や、演劇サークルが専門劇団の物まねやヤクザ演劇から出発し、芸術性や問題意識を深めた作品が作られるようになったことが指摘（高岡 1996）されている。また、1950 年代末に開催された大衆集会における演劇の上演を対象として、知識人や労働者、学生といった社会各層毎の作品に対する評価の差異や討論の形成可能性に言及した研究（長島 2019）がある。一方、地域の演劇運動を対象として、労働者の間で上演作品を巡りどのような議論があったのかは検討されていなかった。

2 方法・対象

本報告では関西（大阪と京都）で結成された自立劇団協議会に着目する。自立劇団協議会に関しては「大阪労演資料」（関西学院大学博物館）をはじめ、各種演劇雑誌や当時の文化運動を主導した民主主義文化連盟の資料の中にも記述がある。中でも本報告では 1945 年～ 1950 年代初頭に京都自立劇団協議会が主催したコンクールでの上演作品を巡る議論を扱う。京都自立劇団協議会の機関紙では上演作品を労働者達が議論しており、本報告の課題を考える上で重要な資料である。当時上演された戯曲も可能な限り収集した上で、上演作品をめぐる論点の差異やその背景となっている労働者間の差異を考察した。

3 結果・結論

労働者達は専門演劇人の支援を受けながら、自分達の手で演劇を生み出そうという抱負を掲げていた。一方、劇を巡る討論からは以下の点が指摘できる。第一に戯曲（創作劇）という点では職場や生活の様子を描いたスケッチ劇から出発して、コンクールで演劇専門家から評価されて全国紙に掲載される作品も現れた。創作劇と既存の劇が同時に上演された場合、創作劇の方が評価される一方で、全国紙に掲載された作品が必ずしも高い評価を得たわけではなかった。第二に演技という点では、個別に上手な人の存在が指摘される一方で、全体的に否定的な評価が多く、経験を積むことで上達するわけではなかった。ただし、職場を描き、普通の仕草通りに演じることが出来た演劇は一定程度評価された。第三に、議論の中では職員組合（ホワイトカラー）と現場組合（ブルーカラー）の差異が現れた。敗戦直後の演劇運動では職員組合と現場組合の二つの組合の両方に演劇サークルが存在していた。そして職員組合（京都府職と京都市職）が上演した劇に対する評価には両者の差異が現れた。府職と市職が劇を上演した際、二つの組合の演劇サークルメンバーは同じ職員として相互の作品を評価した。一方、そうした作品はブルーカラー労働者を中心として組織されている組合の演劇サークルに所属するメンバーからはあまり評価されなかった。

文献

小川史, 2004, 「戦後初期における労働者の演劇実践——生活の演劇形象化をめぐる」『早稲田大学大学院教育研究科紀要』別冊 12: 49-58.

高岡裕之, 1996, 「敗戦直後の文化状況と文化運動——演劇運動を中心として」『年報日本現代史』2: 171-200.